

東京国立文化財研究所要覽

一九五五年

目次

一、沿革	一頁
二、機構	六
A 機構図	七
B 定員及び人事	七
C 定員配置及び現員	八
D 予算	九
三、研究活動	九
A 個人研究	一〇
1 個人研究並に事務分担	一〇
2 科学研究費による研究	一五
助成研究	一五
B 共同研究	一五
1 光学的方法による古美術品の研究	一五
2 科学研究費による研究	一八
(1) 総合研究	一八
(2) 機関研究	二三

C	研究論文等	二四
D	研究報告会	二七
E	講演	二九
F	展 観	三一
四、施 設		三一
A	光学的研究設備	三一
B	保存研究設備	三一
C	蔵書と資料	三一
(1)	蔵 書	三一
(2)	資 料	三一
D	黒田子爵記念室	三三
E	閱 覧 室	三四
F	土地と建物	三四
五、刊 行 図 書		三四
A	昭和三十年の刊行図書	三四
B	既刊図書	三五
六、職 員		三五
七、本研究所関係法規並びに規程		三六

東京国立文化財研究所要覽

一、沿革

本研究所の沿革は、美術研究所の創設に始まる。

美術研究所は、大正十三年七月、故帝國美術院長子爵黒田清輝氏が薨去に際して遺言があつた美術奨励事業のために出捐した資金で、同子爵遺言執行人が選択決定した事業である。即ち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔氏は、故子爵の遺志に従い同資金で行ふ事業の選定を伯爵牧野伸顯氏に一任した。牧野伯爵は、帝國美術院長福原鏞二郎氏及び東京美術学校校長正木直彦氏を通じて諸方面の意見を徴し、又わが國美術上の必要に照して左の事業を行ふことを裁定した。

- (一) 美術に關する基礎的調査研究機關として美術研究所を設けること。
- (二) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (三) 前二項の目的を達するため適当な建物を造営すること。
- (四) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

昭和元年十二月

右の事業を遂行するため委員会が設置され、東京美術学校校長正木直彦氏委員長に就任し、美術研究所事業について東京美術学校教授矢代幸雄氏、黒田子爵作品陳列について東京美術学校教授久米桂一郎氏、岡田三郎助氏、同和田英作氏、同藤島武二氏及び大給近清氏、建築造営について東京美術学校教授岡田信一郎氏、會計事務について遺言執行人打田伝吉氏を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和二年二月

美術研究所準備事業を開始した。

同年十月

東京市上野公園内に耐震耐火、半地階二階建、延坪參百六十坪八合の建物一棟を起工した。

同三年九月

右の建物が竣功したので、美術研究所開設のため必要な備品、圖書、写真等の研究資料を設備し、又館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作品を陳列した。

同四年五月

遺言執行人代表者伯爵樺山愛輔氏は、建物、設備、研究資料等一切の外に金拾五万円をそえて帝国美術院長に寄附を願ひ出た。

同五年六月二十八日

勅令第一二五号により帝国美術院に附屬美術研究所を置かれ、東京美術学校校長正木直彦氏は同研究所の主事に補せられた。

同年十月十七日

美術研究所開所式を挙行した。

同六年十一月二十五日

正木直彦氏は、帝国美術院長を仰付けられ、帝国美術院附屬美術研究所主事を免ぜられた。

東京美術学校教授矢代幸雄氏は、美術研究所主事に補せられた。

同七年一月

美術研究所の研究成果発表機關誌として、定期刊行物「美術研究」を創刊した。

同年四月十八日

株式会社朝日新聞社より明治、大正美術史編纂費として本年より向う五ヶ年間毎年五千円、合計二万五千円を帝国美術院に寄附したい

申出があつた。

同年五月二十六日

帝国美術院は右の申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。

同九年十月十八日

毎年十月十八日を開所記念日と定めた。

同十年一月二十八日

耐震耐火、二階建書庫、延坪三十九坪一棟を竣功した。

同年四月

日本美術年鑑の編纂事務を開始した。

同年六月一日

勅令第四百四十八号により美術研究所官制が公布された。

東京美術学校長和田英作氏は、美術研究所長の事務取扱いを命ぜられ、官制による所員、助手、書記が任命された。

美術研究所研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同十一年六月二十二日

和田英作氏は願により東京美術学校長を免ぜられ、所長事務取扱の職は自然解消し、美術研究所員矢代幸雄氏が美術研究所長に補せられた。

同十二年六月二十四日

勅令第二八一号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来の帝国美術院附置が文部大臣の直轄に改められ、職員定員中所員、

助手各一名を増員した。

同年十一月二十九日

美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同十三年二月十二日

木造建、延坪二九坪六二五写真室一棟が竣工した。

同十七年六月二十九日

美術研究所長矢代幸雄氏は所長を免ぜられ、田中豊蔵氏が美術研究所長事務取扱いを命ぜられた。

同十九年八月十日

黒田清輝氏の作品、並びに写真原板を東京府西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同二十年五月二十八日

美術研究所の図書、諸資料全部を山形県酒田市本町一丁目本間家倉庫三棟に疎開した。

疎開者は、所長事務取扱田中豊蔵氏以下十七名（現地囑託並びに採用者を含む）

事京勤務には囑託田中喜作氏以下十名が残留した。

同年七月―八月

酒田市本間倉庫の図書資料爆撃の危険を避けて、酒田市内外牧曾根村、松沢世喜雄家倉庫、観音寺村、村上家倉庫、大沢村、後藤作之頭家倉庫へ夫々分散疎開した。

同年九月

酒田市疎開の職員は逐次東京に帰任した。

同二十一年三月二十九日

酒田市疎開中の図書、諸資料等の東京向け発送を終了した。

同年四月四日

酒田市疎開中の図書、諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同年四月十六日

東京府西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開中であつた黒田清輝氏作品並びに写真原板の引揚げを完了した。

同二十二年五月三日

美術研究所の官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は、東京国立博物館の附属美術研究所となつた。(所長事務取扱田中豊蔵氏)

同年八月十六日

田中豊蔵氏は美術研究所長を命ぜられた。

同二十三年五月十一日

所長田中豊蔵氏逝去に付、福山敏男が美術研究所長代理を命ぜられた。

同二十四年八月三十一日

松本栄一氏は美術研究所長を命ぜられ、福山敏男は所長代理を免ぜられた。

同 年

本年度より科学研究費により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同二十五年八月二十九日

文化財保護法の制定に伴い、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となつた。

同二十六年一月三十一日

美術研究所の組織規程が定められ第一研究部、第二研究部、資料部、庶務室が置かれた。(昭和二十五年八月二十九日から適用)

同二十七年四月一日

東京文化財研究所の組織規程が定められ、美術部、芸能部、保存科学部、庶務室の三部一室が置かれ、美術研究所の組織規程が廃止された。

文化財保護委員会委員矢代幸雄氏は、東京文化財研究所長の事務代理を命ぜられ同時に前研究所長松本栄一氏は美術部長となつた。

同年七月一日

東京文化財研究所芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室二室を同大学より借用し、研究を開始した。

同二十八年二月十五日

文化財保護委員会委員矢代幸雄氏は、欧米出張に付所長事務代理を免ぜられ、美術部長田中一松は所長事務代理を命ぜられた。

同年四月二十六日

東京文化財研究所保存科学部の研究室は、従来東京国立博物館地階の一室に置かれたが、同館構内倉庫四十坪を改造の上移転した。

同年五月二十七日

矢代幸雄氏欧米より帰朝に付、所長事務代理となり田中一松は所長事務代理を免ぜられた。

同年十一月一日

東京文化財研究所長事務代理矢代幸雄氏は、同所長事務代理を免ぜられ、文化財保護委員会委員専任となり美術部長田中一松が所長を命ぜられた。

同二十九年七月一日

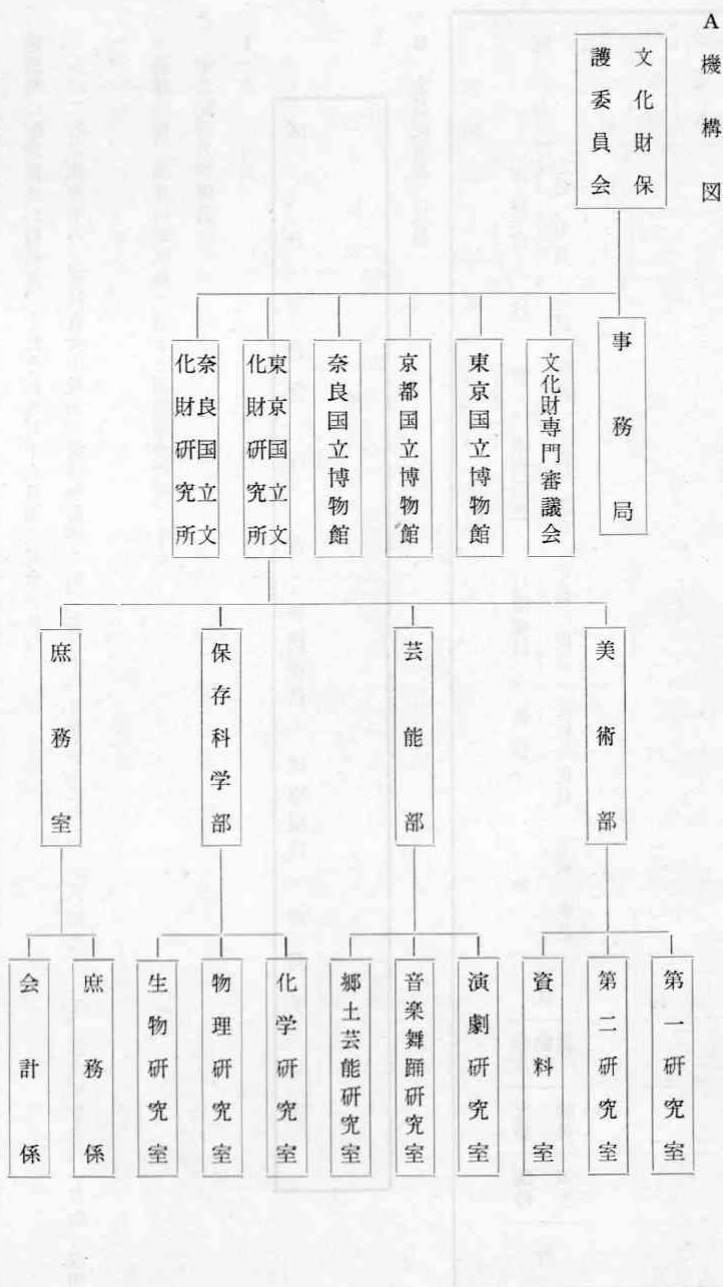
東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となつた。

二、機構

A 機構図

B 定員及び人事

昭和三十年度における定員は、前年度と同様三十六名で左記定員内訳の通りである。



本年度の主な人事異動は、専任の資料室長に文部技官中川千咲が任命され、同時に美術部長福田敏男の資料室長事務取扱の兼務が解かれ、それぞれ六月一日附で発令された。又第一研究室勤務文部技官秋山光和が資料勤務室に、資料室勤務文部技官川上溼が第一研究室勤務に配置換えが行われ、それぞれ六月十六日附で発令された。

かねて病氣休養中の文部技官大串純夫（資料室勤務）が、七月十四日死亡したので、その補充として、宮次男を九月一日附で採用した。

芸能部長、保存科学部長は前年と同様事務代理である。

C 定員配置及び現員

1
定
員

區分	事務官	技官	事務員	技術員	雜務手	計
三十年度	四	一一一	一	七	二	三六

2 定員配置及び現員

昭和三十年度(三〇、一一、一現在)

昭和三十年度(三〇、一一、一現在)					
所長	美術部	芸能部	区分		計
			事務官	技官	
			定員	現員	
	一五	三	定員	現員	
	一四	三	定員	現員	
			定員	現員	
			定員	現員	
	七		定員	現員	
	八		定員	現員	
			定員	現員	
	一二	三	定員	現員	
	一二	三	定員	現員	
	四	一	併任		
		三	非常勤職員		
	一	一	庁務職員		
		一	筆生臨時		
	五	六	計		

計画に従つて分れるが、その研究過程と成果とは相互に影響をもち不離一体の関係にある。共同研究の成果は、数年の成果をまとめて刊行する場合が多い。又個人研究は、原則として毎週水曜日に所員の研究報告会を行い、重要な研究の成果を発表して、これについての広い見地から各研究員が検討を加え、「美術研究」をはじめその他の誌上に発表している。

A 個人研究

1 個人研究並に事務分担

〈美術部〉

上代日本建築の研究

福山敏男

住宅、宮殿、都市、神社、寺院の、主として平安時代までの諸資料について、前年度にひき続き研究を継続。

建築遺構ならびに遺跡に関する調査については、上代都城と宮殿の資料を实地踏査し、藤原宮、平城宮、難波宮、長岡宮、平安宮等に関して調査、又岩手県胆沢城跡、山形県城輪柵跡を調査。

寺院については、大阪四天王寺及び岩手県平泉観自在王院跡の発掘調査に従事。

岩手県、山形県、鳥取県、島根県、岡山県の古建築資料の調査並びに文獻的資料の類集、研究。

(第一研究室)

わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術の調査研究、美術研究の編輯。

西域美術の研究

熊谷宣夫

ミイラン第三、第五古址将来の壁面、志賀山縁起絵巻の構成及び雪舟彩色画等について研究。

九月東北大学文学部東洋芸術史料へ「西域の美術」について出張講義。

書跡の研究

伊東卓治

平安時代書道整理のため、筆写年次推定可能なる紙背文書、殊に仮名消息の調査継続。

宇治平等院鳳凰堂の調査。

京都青蓮院藏紙背文書仮名消息の調査。

古筆類の調査

京都御所に於ける皇室御物の古筆類及び東山文庫の宸翰の調査。

新潟県貞観園藏筆蹟類の調査。

拡大写真による筆跡の性格判定の研究継続。

「光学的方法による古美術品の研究」中筆跡の部を執筆。

京都御所に於いて御物伝藤原行成筆雲紙本和漢朗詠集の筆蹟の顕微鏡写真撮影。

日華禅林墨跡の整理継続。

明治書道史の整理。

仏教図像の研究

(特に両界曼荼羅の調査並に研究)

高田修

京都教主護国寺に伝わる現図系両界曼荼羅の古本（前年度研究者自身発見）を中心とする調査研究。

同寺「真言院曼荼羅」の研究。

高野山金剛峯寺の所謂「血曼荼羅」の調査。

インド美術の研究

（広くインド及び東南アジアの美術に関する研究）

鳳凰堂本尊胎内発見物の調査並に研究。

シナ絵画思想の史的研究

明末の文人画

川上 涇

ともに明の末期、万曆、崇禎年間に活躍し、画技の上で南宗画様式を確立し、絵画思想の面で尚南貶北論を唱導した董其昌と、書画の両者に個性的な手腕を示した張璠の二人について、その伝歴、作品の調査、研究。

関西某家蔵中国画の調査

現在京都国立博物館に仮寄托中の関西某家コレクションは、その先代が当時新渡の中国画と江戸時代将来の画蹟とを蒐集したものの、明清画の佳品に富むが、南宗系古典作品の模本もある。約六十点を調査。

（第二研究室）

わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術の調査研究。

日本美術年鑑の編輯。黒田記念室の事務。

明治、大正時代絵画の研究

明治、大正時代絵画史の研究

隈元謙次郎

国立近代美術館との「総合研究」に参加、藤島武二、山本芳翠、藤田嗣治等の画家を担当、作家並びに作品についての資料の蒐集、調査を継続。

現代美術界の調査研究

（特に明治以降のわが国洋画家の研究）

国立近代美術館の「総合研究」に参加、小出楢重、岸田劉生等を担当、作家並びに作品についての伝記、資料の蒐集、調査を継続。

本年度の美術界全般に亘る調査研究

調査並に資料の蒐集、日本美術年鑑の編輯。

明治以降における彫刻の研究

（明治彫塑史）——特に木彫に重点を置き研究、山崎朝雲を中心とする伝統木彫の復興について調査、又この期の唯一の団体である「日本彫刻会」の活動の調査、日本美術年鑑の編輯。

現代美術の調査並に資料蒐集

（特に現代日本絵画の調査研究）

明治以降における日本絵画の発展をその美術思潮、団体と共に調査。

上村松園、柴田安子等の年譜作成、資料蒐集。

（資料室）

美術研究資料の作成、収集、整理、保管公表及び閲覧並びに美術研究資料に関する写真の作成及びその原板の保管並びにエックス線写真、赤外線写真、紫外線写真その他の特殊写真による美術の研究。「東洋古美術文献目録」

岡 畏三郎

中村 伝三郎

関 千代

の編輯継続。

東洋古陶磁の研究

中川 千咲

(特に東洋古陶磁を中心とする工芸意匠の研究) 古九谷文様、織部陶の文様等の研究。

工芸品の光学的研究

主として古陶磁の釉、技法の顕微鏡観察。

近代工芸作家の研究

宮川香山、板谷波山等の作品の調査研究。

日本上代絵画史の研究

秋山 光和

(特に世俗画の研究)

奈良平安時代における世俗画の様式的展開を、作品の精密な調査と関係文献の整理とにより実証的に追求、特に宇治平等院鳳凰堂壁画面に関する詳細な調査研究。

東洋絵画に対する光学的鑑識法の適用に関する研究とその実施。

X線、紫外線、赤外線、顕微鏡等を応用して、東洋絵画の技法、材質、補修状態等を明らかにすることを目的とし、本年度は室生寺金堂板絵、高野山阿弥陀聖衆来迎図、同涅槃図、御物聖徳太子絵像等に対し実施。

フランス・ペリオ調査団の中央アジア旅行とその将来品の調査、整理。

滯仏中調査したペリオの手記及び将来品に基づき、ツムシユク、ドルドル・アクル、スパン等の遺蹟に関する資料の整理と研究。

光学的方法による日本古代彫刻の研究

久野 健

X線、γ線、顕微鏡写真等を活用し、日本古代彫刻の内部構造を調査、制作過程、年代、系統、発展過程等を研究。

平安時代彫刻史の研究

日本各地に分布する平安時代彫刻を調査、その材料、造像法、年代等を研究し、中央の彫刻様式が地方に伝わってゆく年代、定朝様の分布とその年代を取りまとめる。

彩色文様の研究

上野 アキ

上代彫刻における纏網彩色文様の資料の収集、並びにそれに続く各時代の資料の収集継続。

図書及び写真の整理

△芸能部△

(演劇研究室)

演劇及びその保存に関する調査研究並びにその結果の公表に関する事務。

近世歌舞伎劇の研究

浦山 政雄

戯曲史上の鶴屋南北を中心とする文化文政期の研究を終り、河竹黙阿弥を中心とする幕末から明治初年に及ぶ時期を研究、戯曲に関係ある部分は「日本文学史」江戸時代篇の一部に発表。

基礎資料として黙阿弥興行年表作成のため、番附類の資料蒐集。歌舞伎舞踊古曲の研究

既に廃曲とされているもので現在高齢の舞踊家によつて伝承されている文化―天保年間初演の歌舞伎舞踊を発見、録音、撮影、型の記録等により古歌舞伎の実態を把握。

(音楽舞踊研究室)

音楽及び舞踊並びにその保存に関する調査研究並びにその

の結果の公表に関する事務。

能の音楽的及び舞踊的研究

能の音楽的解明のため、五線譜による表記法を研究、ほぼ実用の段階に至る。

横道萬里雄

代表曲十曲の総譜の作成、及び練習譜の作成準備の終了と能管唱歌の分析を継続。

和泉流狂言謡の主要曲全部を採集、これを慣用譜及び五線譜によつて整理、黒川能(山形)の録音、分林の実施。

能楽諸文献の調査

一噌流分家の文書の調査(東京教育大西山助教と共同調査)観世

流宗家の文書の調査(国語研究所西尾所長、東京教育大小西教授、

能楽研究所表所員、観世流能楽師観世寿夫氏と共同調査)を実施。

近世邦舞における型の単元の調査

(郷土芸能研究室)

郷土芸能及びその保存に関する調査研究並びにその結果

の公表に関する事務。

郷土芸能の研究

芸能分類論

三隅治雄

郷土芸能を形態、技術、演目、時期、演者、名称、知識の観客各面から比較検討し、夫々の立場から分類してゆこうとする研究で、現在文書調査によつて約二千の芸能資料を各地より収集し、それ

に既刊書目の芸能記録を加えて分類基礎台帳を作成、又本年度は特に技術による分類を考究、舞と踊に關して写真資料(舞型記録)約百三十を収集照合し、「踏む芸」、「跳躍芸」、「旋回芸」、「行道芸」の四分類をたてた。

念仏芸の研究

三・信・遠国境地帯所在の約二十の盆時の念仏踊、福島県白河附近六ヶ所の念仏芸、京都、兵庫、奈良、鹿児島、長崎各県所在の諸芸能を实地調査、写真、録音等に収録又文書に記録。

△保存科学部▽

(化学研究室)

文化財及びその保存に関する化学的及び分析的調査研究並びにその結果の公表に関する事務。

紫外線照射によるインクの褪色実験

岩崎友吉

水銀燈を用い、比較的短時間に褪色を起すことを確認、鉄を含むインクの褪色したものを再び発色させることに関連した実験。

剥落防止用樹脂に関する実験

無色透明なものとしてブチラル系統のものを取りあげ性能を検討。

シリコンの応用

剥落止め、せまい製品強化等の作業中、作業板としてシリコン加工板を用いて資料の附着を防ぎ好成績。

石膏鉄心の防錆

石膏製品が鉄心の錆による膨脹のため破壊されるのを防ぐため、

V・P・Iによる加工を実験。

位相差顕微鏡技術の導入

まず、せんの同定の一方法として、連糸について試験、明瞭な写真を得るため実験継続。

腐朽木材の強化

木彫神像の破片について三種類の合成樹脂を応用し、その仕上りについて検討中。

石膏製品の保存についての研究

表面の清掃、特にブロンズ鑄造の際の汚れ、脆弱部の強化等について効果的処置を行うことを確認更に研究中。

P・C・Pの使用量についての検討

茅葺等特殊なもの、木材等に刷毛塗りした場合の適正量についての実験。

紙の保存に関する研究

薄葉について揉み試験を継続。

文化財の安全輸送に関する調査研究

放射化分析(Activation Analysis)の文化財への応用

文化財に対する分析は、非破壊的な方法が最上。この方法は試料を全然損壊せず、中性子等で分析試料を衝撃して、試料中の元素に人工放射能を附与し、その放射能の強度と特性を測定し、成分元素の定性定量分析を行う方法で中性子源としてサイクロトロンを使用する。科研、東大化学教室の施設を借用実験、現在までに金沢

城、石川門、鉛瓦中の銀、昌寧出土の渡金中の銀の定性を行い満足の結果を得。金属のみならず多方面に利用可能。

青銅器の成分の分析化学的研究

江 本 義 理

これは、主成分、微量成分の特色により地域的の差異、原産地との結びつき、技術の変遷等の考古化学的知見を得ることを目的としている。

微量の試料を扱うための分析法として分光分析、イオン交換樹脂の利用、電解分析を検討。

古代釘の成分

法隆寺金堂の古代釘(当初、中世、近世、江戸末)四種について成分の研究。

(物理研究室)

文化財及びその保存に関する物理学的調査研究並びにその結果の公表に関する事務。

7線による金銅仏の透視

登 石 健 三

法隆寺宝蔵内の金銅仏十数体について透視撮影を実施。

玉眼の材質検査

東京国立博物館所蔵の木彫像の玉眼についてその材質が硝子か水晶であるかを検査、ナトリウムランプよりの単色光を用い、偏光によつて複屈折の有無を実験。

梱包内の湿度自動調節について
密閉梱包内の湿度が外気温の変化によつて非常に変化し、内容に大きな悪影響を来すことを防ぐため、既に吸湿し梱包時に外気と

平衡にある吸湿剤を同封してやることを提唱したが、数種の吸湿剤についてその特性を実験、シリカゲルよりも他に良剤のあることを発見。

岩絵具の褪色

螢光燈と白熱燈との同ルックスによる褪色差の比較実験、新計器購入により今後定量的に切り代える。

国際会議出席及び各国研究機関視察

資料の整理。

(生物研究室)

B 共同研究

1 光学的方法による古美術品の研究

本研究所の光学的方法による古美術品の研究は、一九三〇年頃から美術研究所（現東京国立文化財研究所美術部）の中根勝氏により、X線、赤外線、紫外線、拡大写真などに関する実験的研究が行われた。その結果は、昭和十二年「美術研究」七十二号に発表されて、この種東洋美術に対する適用の可能性が認められた。この貴重な実験的研究も、本格的機械設備を有するまでに至らぬうち、戦争によつて中断された。

戦後、本研究所では再びこの問題の重要性を取上げ、所員秋山光和を研究担当者とし、所員中川千咲、岡長三郎、久野健を所内の協力者、東京大学工学部助教授中山秀太郎氏、名古屋大学理学部教授理博山崎一雄氏を所外の協力者として研究班を組織した。昭和二十四年度から同二十五年、同二十六年度（この年の担当者は中川千咲）にわたつて科学研究費（個人研究）の交付を受け、また研究所予算にも機械設備の購入費が認められて、研究着手の運びとなつた。

これと前後して所員秋山光和は、昭和二十五年より同二十六年にわたる歐洲留学中、諸国の各研究機関、美術館においてすでに実

文化財及びその保存に関する生物学的調査研究並びにその結果の公表に関する事務。

防黴剤、殺虫剤の研究

岩崎友吉
江本義理

2 科学研究費による研究

助成研究

a 消息を通じてみたる藤原俊成筆蹟の展開

田村悦子 二〇、〇〇〇円

b 飛鳥、奈良地方所在の一群の石像研究

猪川和子 二〇、〇〇〇円

方法とその設備、③東洋美術品に対する適用の成果の三部に分ち各研究担当者が分担執筆し、豊富な図版(八十二葉)によつて、具体的
にその実例を示した。なお、この外この研究に関する発表論文は次の通りである。

「美術研究」所載関係論文目録

第一五九号(昭和二十六年二月)

光学的方法による美術品の鑑識

前言

X線透過法による仏像の研究

X線による彫刻の実験

紫外線による絵画の調査

第一六三号(昭和二十六年十一月)

Xレイによる彫刻の調査

第一六六号(昭和二十七年八月)

東大寺の塑像

第一六八号(昭和二十八年二月)

光学的方法による絵画の研究——ヨーロッパに於ける研究の現状と東洋絵画への適用

日本画顔料のX線透過に関する実験

絵因果経・紫式部日記絵巻・金棺出現図のX

線による彫刻の実験

紫外線による古陶磁の実験

ルイヴル研究所に於ける美術品の科学的

研究(第一七一号(昭和二十八年十一月))

木心乾漆像について

秋山光 和	中山秀太郎	久野 健	山崎 一雄	久野 健	久野 健	秋山光 和	中山秀太郎	久野 健	久野 健
-------	-------	------	-------	------	------	-------	-------	------	------

第一七二、一七三号(昭和二十八年十二月、二十九年三月)

蔵島神社所蔵小形檜扇絵について

第一七四号(昭和二十九年三月)

源氏物語絵巻についての新知見

源氏物語絵巻の顔料について

第一七九号(昭和三十年一月)

教王護国寺所蔵唐櫃とその絵画

第一八二号(昭和三十年十二月)

鳳凰堂本尊胎内納置の阿弥陀大小呪月輪及

び蓮台の構造と彩色文様

鳳凰堂本尊胎内納置の阿弥陀大小呪月輪台

座の楽書

鳳凰堂本尊納入物の透過撮影

鳳凰堂本尊胎内納入物中のガラス破片につ

いて

研究報告会

ヨーロッパにおける美術品の光学的研究

(昭和二十七年二月)

光学的方法による東洋美術品の鑑識に関する研究(昭和二十八年二月)

アイソトープによる金銅仏の透視研究(昭和二十九年三月)

秋山光 和	中山秀太郎	秋山光 和	伊東卓治	久野 健	山崎 一雄	秋山光 和	研究者全員	登石健三	久野 健	千沢 治
-------	-------	-------	------	------	-------	-------	-------	------	------	------

(1) 総合研究

a	研 究 課 題	代 表 者	交 付 金
	光学的方法による法隆寺宝物の総合的研究	田 中 一 松	四十万円

本研究の光学的方法による古美術品の研究は、昭和二十四年より科学者と美術史家が協力して、東洋美術品の光学的放射線の鑑識及び研究に従事してきた。この結果は、絵画、彫刻、工芸の各分野に新しい研究問題と又多くの成果を得た。殊に、①彫刻においては、八世紀に流行した木心乾漆彫刻の造像法、寄木造彫刻の発生の諸原因等(主としてX線使用)②絵画においては、古代顔料の性質、年代判定等(主として紫外線、X線使用)③工芸においては、顕微鏡写真撮影による焼物の窯の判定、織物の織り方等④書跡においては、運筆、筆の性質等を究明することができ、従来肉眼により主観的判断を下していたものに対して、客観的な新資料をもたらしてきた。

設備においては、漸次改良拡張が行われ、X線透過装置の如きも白色単色等四台を数うるに至っている。又従来本研究の設備では、銅造彫刻を透過撮影することは難しかったが、昭和二十八年から「コバルト60」を使用して透過撮影に成功している。

以上の如く六年間にわたつて、美術史家と科学者との協力による光学的研究は、ほとんど東洋美術品の全分野に適用することが可能となつたので、それらの諸方法と全機能を發揮して本研究を進め、日本美術史の根幹をなす法隆寺伝来の諸宝物を総合的に解明しようとするものである。

本研究は、美術史家による研究と、専門科学者による諸方法の研究とに大別されるが、美術史家による研究は、絵画、彫刻、工芸の三つに分れる。①絵画については、法隆寺の玉虫厨子須弥座絵、橘夫人厨子絵及び東京国立博物館保管(法隆寺伝来)聖徳太子絵伝のX線、紫外線、赤外線等による調査撮影と、その顔料技法の判定を行い、更に美術史的判断を加えて年代、様式、系統など

を究明する。②彫刻については、玉虫厨子の本尊、橘夫人厨子須弥座三尊像及び小金銅像のγ線による透過撮影を行い、従来撮影を行つたその内部構造より法隆寺伝来四十八体仏像との比較研究を行つて、時代判定に役立たしめる。また、百済観音像、五重塔塑像等は、X線にて透過撮影を行い、日本の古代木彫及び塑像の研究を行う。③工芸については、玉虫厨子附属の金工品を顕微鏡撮影することにより、その毛彫、蹴彫、魚子等の手法を判別、同様の方法にて古代染織品の組織及び繊維の質の判定を行い、螢光によつての染料品等の鑑別をも行う。

以上の如く美術史家の実際の研究と併行して、科学者による新しい光学的鑑識法の研究と実験を行い、順次実物調査に應用し得るようにしてゆく。即ち、古美術品のX線透過法特に二次X線による特殊撮影法の研究や、古代顔料の光学的放射線の判定、特にβ線の後方散乱による測定の研究、γ線による金工品及び陶磁器の透過撮影の研究等を行うものである。

光学的方法による美術品の鑑識は、一九二〇年代の末から、ヨーロッパにおいて実験的研究が開始され、大戦前すでに応用段階に達していた。戦後、その利用が殊に盛んで、重要な美術館、研究機関では完備した設備をもつて美術史的研究や、保存修理事業に應用している。中でもイギリスにおける British Museum、フランスの Palace du Louvre、アメリカでは Metropolitan Museum、や Fogg Museum の附属研究所が著名であり、又、ベルギーの Laboratoire Central des Musées de Belgique、イタリーの Istituto Centrale del Restauro、は中央国立研究所として大規模な研究を行つてゐる。

わが国におけるこの種研究の先鞭は、一九三〇年頃から前述の通り行われたが、設備をととのえぬうち戦争のため中断した。戦後の組織的な研究や、應用としては、本研究所研究班があるのみであるが、部分的な應用としては、「当麻曇茶羅のX線透視」(大賀一郎氏)、「正倉院密陀絵の紫外線鑑識」(大林氏他七氏)、「パータートロンによる金属像透視」(浅田研究室)等が数えられる。特に法隆寺宝物については、古く金堂壁画の赤外線写真が撮影されたことと、昨年玉虫厨子の螢光観察が行われた以外には研究例がない。

本研究の分担課題並に研究分担者は次の通りである。

研究分担課題	分担者	職	所屬機関
法隆寺伝来の絵画的遺物に対する光学的鑑識	田中一松	研究所長	東京国立文化財研究所
法隆寺伝来の彫刻的遺物に対する光学的鑑識	秋山光	研究員	
法隆寺伝来の工芸的遺物に対する光学的鑑識	小沢健志	写真主筆	
法隆寺伝来の工芸的遺物に対する光学的鑑識	久野健	研究員	同
法隆寺伝来の工芸的遺物に対する光学的鑑識	橋本弘次	写真部員	同
法隆寺伝来の工芸的遺物に対する光学的鑑識	中川千咲	研究員	同
法隆寺伝来の工芸的遺物に対する光学的鑑識	山辺知行	工芸課染織室長	東京国立博物館
古美術品の透過法、特に二次X線による特殊撮影法の研究	中山秀太郎	助教	東京大学工学部
古代顔料の光学的放射線の判定特に β 線の後方散乱による測定の研究	山崎文男	主任研究員	科学研究所
γ 線による金工品及び陶磁器の透過撮影の研究	山崎一男	教授	名古屋大学理学部
	登石健三	研究員	東京国立文化財研究所
	平田穰	研究員	科学研究所

b

研究課題	代表者	交付金
鳳凰堂の総合的研究	福山敏男	四十七万円

宇治平等院鳳凰堂は、藤原時代美術、工芸の最高水準を示すもので、わが古建築のうち最も重要な遺構の一つである。同堂の大修理工事は、部材全部の解体を終り、本年に至つて再び柱を立て、組みあげられつつある。この機会を捉えて、建築、彫刻、絵画、書跡、工芸、化学、写真等の各方面から能う限り詳細な調査を行い、これに文献的研究によつて得られた知識を加えて復原的研究を行い、同堂の解体以前には解決しがたかつた幾多の問題を明かにしようとするものである。この研究は、昨年度からの継続

研究であるが、本年は調査を更に補足して、特に同堂が漸次組立てられてゆくので、工事の進行に伴つて、昨年度自由に検討しがたかつたものも、今年は細部にわたつて調査できる予定である。その主な研究計画は、①文献資料については、その博搜を継続する。②建築技法については、昨年度は、同堂の解体材が、尾廊、翼廊等に積み重ねてあつて、自由に調査できなかった。本年は、工事の進行に伴つて細部の撮影、調査を行う。③仏像彫刻については、本尊が修理中であるため、この機会に胎内納入物など従来みることができなかったものや、又その技法について十分の撮影調査を行う。④壁画、扇絵、柱絵等については、大壁二面等の撮影調査を行う。⑤顔料等の化学的研究については、昨年度の調査を補足して一層精細な撮影調査を行う。⑥色紙形の書跡については、関係資料との比較研究を行う。⑦特殊写真については、紫外線照射、赤外線乾板などによる方法によつて、図様、墨書などとはできるだけ明確に捉える、等である。

鳳凰堂についてのこれまでの研究には、古く故関野貞博士の研究があり、明治の修理に際しては、故武田五一博士の研究が最も重要なものである。その後、津田敬武氏の「鳳凰堂の研究」、田中喜作氏の「鳳凰堂雲中供養仏」も出されている。「平等院図鑑」は、福田敏男と森暢氏の共著で昭和十九年に出版されている。又福田敏男の平等院の境内古図、小御所、経蔵に関する研究がある。分担者久野健は、昭和二十八年にX線照射による本尊の調査に成功している。分担者秋山光和は、かねてから同堂の壁画について詳細な調査を続け、本尊後壁画に関する研究は、「美術研究」に発表している。又昭和二十八年にはX線による壁画の調査を行つてゐる。名古屋大学教授山崎一雄氏は、同堂の壁画の顔料の研究を行つてゐる。

本研究の分担課題並びに研究分担者は、次の通りである。

研究 分 担 課 題		分 担 者	職	所 属 機 関
総合及び文献的研究 建築技法 仏像彫刻における定朝様の研究		福 山 敏 男	研究員	東京国立文化財研究所
		浅 野 清 教	研究員	奈良学芸大学
		久 野 健	研究員	東京国立文化財研究所

研究分担課題		分担者	職	所属機関
壁面、屏絵、柱絵の研究 顔料、金属、ガラスその他の材質の化学的研究 色紙形の書跡の研究 工芸技法の研究 特殊写真撮影による調査	c	秋山光和	研究員	東京国立文化財研究所
		山崎一雄	教授	名古屋大学
		伊東卓治	研究員	東京国立文化財研究所
		岡田譲	資料課長	東京国立博物館
		小沢健志	写真室主任	東京国立文化財研究所

研究課題	代表者	交付金
「翁」の総合的研究	加藤成之	三十六万円

「翁」は、各時代にわたり、又、音楽、舞踊、演劇、郷土芸能等各部門に関連をもつので、この性格を科学的に分析、研究することは、とりもなおさず、日本における芸能の根本的な問題を明かにすることでもある。

従つて、本研究は各部門における「翁」を美学的、音楽学的、演劇学的、民俗学的立場から調査研究しようとするもので、その研究計画は、①能、シテ方、囃子方、狂言方、各流現存の「翁」、②近世邦楽、舞踊、歌舞伎、人形劇、三曲、長唄及び義太夫、常磐津、清元、河東節の浄瑠璃各流に残存する三番叟物、祝儀物としての十数曲、歌舞伎劇場史実に現れる古式の「翁」、③各地における郷土芸能として存続する「翁」等の録音、撮影、記録、調査を行い、総合的に「翁」の性格を究明しようとするものである。

本研究所の「翁」の調査は、昭和二十八年六月より継続的に実施しているが、その主なものは、①観世流謡、和泉流狂言、森田流笛、幸流小鼓、幸清流小鼓、観世流小鼓、葛野流大鼓等による「翁」、②山田流箏曲による「翁」、③長唄「翁千歳三番叟」、④群馬、神奈川各地の人形芝居の「翁」、④静岡、伊豆半島各地及び淡路島における能楽系統の「翁」、⑤奈良坂の「翁」、西浦及び田峯田楽の「翁」、国栖舞の「翁」、雪祭りの「翁」、春日神社御祭及び呪師走りの「翁」、島根県佐陀神能及び平田市園町の三番叟等の調査であ

本研究についてのこれまでの文献には、折口信夫氏の「翁の発生」、山崎樂堂氏の「猿樂の翁」等があるが、本田安次氏の「能及び狂言考」、「山伏神樂、法印神樂」、「霜月神樂之研究」、能勢朝次氏の「能樂源流考」、九重左近氏の「江戸近世舞踊史」、高野辰之氏の「日本演劇史」、町田嘉章氏の「ラヂオ邦楽の鑑賞」等がこれに関連するものとして重要である。

本研究の分担課題並びに研究分担者は、次の通りである。

研究 分 担 課 題	分 担 者	職	所 属 機 関
翁の美学的研究 翁の音楽学的研究 翁の民俗学的研究 能における翁の研究 近世邦楽における翁の研究 近世舞踊における翁の研究 歌舞伎、文楽における翁の研究 郷土芸能における翁の研究	加藤成之助 岸辺成雄 池田弥三郎 横道萬里雄 町田嘉章 戸部銀作 浦山政雄 三隅治雄	教授 教授 教授 教授 研究員 研究員 研究員 研究員	東京芸術大学 東京大学 慶応義塾大学 東京国立文化財研究所 東京芸術大学 東京国立文化財研究所 同 同

(2) 機 関 研 究

研 究 課 題	担 当 者	協 力 者	交 付 金
古美術品の変色に関する研究	関野克	岩崎友吉 登石健三 江本義理	二百五十万円

古美術品の保護保存上、その変色を防止することは最も重要な問題であるが、いままでは、これについての組織的な研究がなく、又防止策

についても確立されていない。

特に、近時螢光燈の普及が（一般の照明は勿論この研究の対象であるが）増大したが、これらの美術品に対する影響については何等結論をみていない。又東洋美術品特に絵画においては、西欧のそれに比して独特の手法によつており、顔料が変色の原因に対してより直接に、大きく影響を与えていると考えられるが、これについても同様その結論をみていないのである。こうした問題を各種の変色の機構を明かにすることによつて解決しようとするものである。

本研究は、このような要望に対し、物理的、化学的立場から組織的な研究を行うもので、①顔料等の精密な分析 ②これら成分組成の明瞭なものに対し、種々の光源を用いて照明した場合の影響 ③種々のガスに接触した場合の変化 ④湿度の影響等を研究調査して、外的条件の許容限界を定めること等でこの問題の防止対策に資することを目的としている。

まず、本年度においては、各地の収蔵庫、展覧場等について照明の状態、有害とみなされるガスの存在等について測定を行い、法隆寺、鳳凰堂その他合成樹脂で処理したものに對しては色の経年変化の資料を作成する予定である。

現在までは、装置不備のため靨色を白熱電球と螢光燈とについて、肉眼的觀察による比較をしたに過ぎないが、岩絵具についてこれを行うと、赤系統の絵具、特に丹の場合は、螢光燈の照度を低くして実験しても、白熱電球で照明するより著るしい靨色を示した。これは三ミリ厚の窓ガラスをフィルターとして用いた時も変りなく起つたので、この原因は、螢光燈より発せられる僅かな紫外線によるものではなく、螢光燈では、白熱燈よりも特に豊富な青色光線によるものであらうという結論もでている。

靨色については、特に染料、顔料、塗料、合成樹脂等について曝露試験、促進試験等の各種試験が、主として工業上の必要から内外共に、かなり行われている。しかしその対象は、古美術品とはむしろ縁の遠いものが多く、又測定方法も精密なものでない場合が多い。

海外博物館附屬研究所においては、主として螢光燈を中心とする各種光源の美術品に対する影響が研究されつつあるが、手法、材料を異にする東洋美術品に対しては、そのまま適用できない実例がすでにみられている。

C 研究論文等

△美術部▽

下村 観 山

武人画家の系譜

大谷ミッション将来の玄奘三蔵画像二図 (図版解説)

信貴山縁起絵巻の成立をめぐる歴史的諸条件

同絵巻研究の序説として

浜松図屏風について (遺稿)

黒田清輝作品補遺 上

西域出土塑造頭部 (解説)

平泉千手院の鉄樹

ベゼクリク第八号窟寺将来の壁画

明治期の洋画

黒田 清 輝

ミイラン第三及び第五古址将来の壁画

教王護国寺所蔵唐櫃とその絵画

法隆寺政所并法頭略記

副島蒼海先生の書

古九谷意匠の一考察

董其昌筆做楊昇没骨山水図 (解説)

川上 涇	中川 千咲	伊東 卓治	福山 敏男	秋山 光和	熊谷 宣夫	隈元 謙次郎	隈元 謙次郎	熊谷 宣夫	福山 敏男	熊谷 宣夫	隈元 謙次郎	大串 純夫	持丸 一夫	熊谷 宣夫	田中 一松	隈元 謙次郎
美術研究一八〇号	美術研究一八〇号	美術研究一七九号	美術研究一七九号	美術研究一七九号	美術研究一七九号	現代日本美術全集第二卷	現代日本美術全集第二卷	美術研究一七八号	ミューゼウム四八号	美術研究一七七号	美術研究一七七号	美術研究一七七号	美術研究一七七号	美術研究一七七号	美術史	現代日本美術全集第一卷
三〇・三・三一	三〇・三・三一	三〇・三・三〇	三〇・三・三〇	三〇・三・三〇	三〇・三・三〇	三〇・三・三〇	三〇・三・三〇	三〇・三・二二	三〇・三・一	三〇・二・五	三〇・二・五	三〇・二・五	三〇・二・五	三〇・二・一	三〇・二・一	三〇・一・一〇

東南アジアの美術

近代リアリズムの発

東寺と正系現図曼荼羅の桐承

鳥獸戯画

秋久山水図

日光菩薩半跏像

カニシユカ大塔及び舍利容器的再検討
——ガンダーラ美術の展開における様式的指標として——

明治の美術

インド・東南アジアの金銅仏

アジャンタの壁面

平泉千手院の鉄樹（補録）

中国美術の伝統

平等院鳳凰堂本尊胎内納置阿弥陀大小呪月輪の調査

鳳凰堂本尊胎内納置の阿弥陀大小呪月輪及び蓮台の構造と
彩色文様

鳳凰堂本尊胎内納置の阿弥陀大小呪月輪台座の楽書

鳳凰堂本尊納入物の透過撮影

△芸 能 部▽

能作の流れ

横道萬里雄	久野	伊東卓治	秋山光	福山敏男	熊谷宣夫	福山敏男	高田修	高田修	隈元謙次郎	高田修	久野健	熊谷宣夫	田中一松	高田修	隈元謙次郎	高田修
日本文学講座	美術研究一八二号	美術研究一八二号	美術研究一八二号	美術研究一八二号	美術研究一八二号	国立近代美術館 ニユース	ミュージアム 五七号	みづゑ六〇五号	明治文化史全集 第一巻	ミュージアム 五六号	ミュージアム 五〇号	ミュージアム 五〇号	ミュージアム 五〇号	仏教芸術二四号	国立近代美術館 ニユース	世界文化地理大系 一九
三〇・一・一	三〇・一二・一五	三〇・一二・一五	三〇・一二・一五	三〇・一二・一五	三〇・一二・一	三〇・一二・一	三〇・一二・三	三〇・一一・一	三〇・一〇・二八	三〇・一一・一	三〇・五・一	三〇・五・一	三〇・五・一	三〇・四・一五	三〇・四・一	三〇・三・三一

雪まつりの研究

民俗芸能研究の方向

演技伝承

狂言の新しい動き

黒川能のこと

なんばん芸の展開
——芸能技術論——

遠山まつり

〈保存科学部〉

A light condenser for spectrographical purposes

薬師寺その他の大金銅仏の？線写真撮影に関する記事

人工照明の美術品に及ぼす影響に関する最近の議論

歐洲に於ける博物館附属研究所

ウイーンの思出

フランスの博物館附属研究所

D 研究報告会

〈美術部〉

武人画家の系譜

東寺所蔵唐櫃の人物画

飛鳥時代

三 隅 治 雄 雪まつり 三〇・三・一

三 隅 治 雄 芸能復興 三〇・四・一

三 隅 治 雄 演劇評論 三〇・五・一

横道萬里雄 文 学 三〇・一〇・一

横道萬里雄 観 世 三〇・一一・一

三 隅 治 雄 国学院雑誌 三〇・一一・一

三 隅 治 雄 遠山まつり 三〇・一二・一

Nature 三〇・一・八

富士フィルム研究 三〇・三・一五

發表誌 三〇・三・三一

古文化財の科学 三〇・一〇・三一

古文化財の科学 三〇・一一・一

日本文化財 三〇・一二・一

ミュージアム 三〇・一二・一

登 石 健 三

登 石 健 三

登 石 健 三

田 中 一 松 三〇・一・一九

秋 山 光 和 三〇・一・二六

久 野 健 三〇・二・二

觀自在王院の調査

〔慶陵〕書評

新出の可翁作品

古九谷の意匠

天平時代

副島蒼海の書と明治書道

香聞御記と若州繪

明治初期の洋画家たち

董其昌筆没骨山水図軸

雪舟の彩色画について

鳳凰堂本尊胎内納置阿弥陀大小呪円板について

松園展について

張璠圖書画冊

山崎朝雲遺作展について

一休と彼をめぐる画人たち

平安初期時代

秋月揚子江図巻

変文と絵巻

福山敏男	川上涇	田中一松	中川千咲	伊東卓治	大串純夫	隈元謙次郎	川上涇	熊谷宣夫	福山敏男	高田卓修	伊田光治	秋山光代	関千代	川上涇	中村伝三郎	田中一松	川上涇	熊谷宣夫	秋山光代
三〇・二・一六	三〇・二・二四	三〇・三・二	三〇・三・九	三〇・三・三三	三〇・三・三一	三〇・四・二〇	三〇・四・二七	三〇・五・一一	三〇・五・一一	三〇・五・一八	三〇・五・一八	三〇・五・二五	三〇・五・二五	三〇・六・一	三〇・六・一	三〇・六・八	三〇・六・二二	三〇・六・二二	三〇・六・二九

貞観彫刻の諸流派

俊成筆蹟の整理

平安時代後期(一)

阿界曼荼羅について

毛越寺及び観自在王院の発掘

平安時代後期(二)

上代の窯業

△芸 能 部▽

平曲と声明・謡曲の音楽的關係

謡曲の「位」を構成する要素について(一)

江戸人形浄瑠璃史の資料としての恵明寺文書

芸能研究方法論

謡曲の「位」を構成する要素について(二)

△保存科学部▽

文化財に対する「シリコン」の利用について

仏像の玉眼について

E 講 演

△美 術 部▽

寺の文化史的価値

久 野 健 三〇・七・六

田 村 悦 子 三〇・七・一三

秋 山 光 和 三〇・九・二一

高 田 修 三〇・一〇・五

福 山 敏 男 三〇・一一・九

秋 山 光 和 三〇・一一・一六

中 川 千 咲 三〇・一二・七

横 道 萬 里 雄 三〇・四・三

横 道 萬 里 雄 三〇・五・一〇

浦 山 政 雄 三〇・五・二一

三 隅 治 雄 三〇・五・二一

横 道 萬 里 雄 三〇・五・二四

岩 崎 友 吉 三〇・三・二四

登 石 健 三 三〇・三・二四

久 野 健 三〇・三・二八 於東京国立博物館

奈良時代における造寺造仏の機構

平安仏教の特色とその芸術

藤島武二の人と芸術

藤島武二の作品

梁楷の芸術

△芸術部▽

能の今日的諸問題

芸能史より見たる御車山行事

芸能研究の指向する道

民俗芸能の意味するもの

郷土芸能を守るもの

民俗芸能の保存方策について

能楽鑑賞の態度

△保存科学部▽

防殺虫並に合成樹脂について

法隆寺金堂壁面の合成樹脂による処置

日光に於ける漆上彩色の修理

防殺虫処置について

歐洲見聞記

ICOM会議出席報告

福山敏男 三〇・三・二九 於東京国立博物館

田中一松 三〇・三・三一 於東京国立博物館

隈元謙次郎 三〇・一・二九 於鹿兒島美術館

隈元謙次郎 三〇・一・三〇 於鹿兒島美術館

田中一松 三〇・二・一〇 於本研究

横道萬里雄 三〇・三・一六 於如水会館

三隅治雄 三〇・六・七 於高岡市広陵中学

三隅治雄 三〇・六・八 於高岡市広陵中学

三隅治雄 三〇・六・二二 於山鹿市公民館

三隅治雄 三〇・八・一六 於山鹿市公民館

三隅治雄 三〇・一〇・一 於松本市二の丸広場

横道萬里雄 三〇・一〇・二九 於觀世会館

岩崎友吉 三〇・二・二 於三十三間堂修理事務所
Museum für Völkerkunde Wien I, Österreich

登石健三 三〇・七・一六 於京都国立博物館

岩崎友吉 三〇・九・一六 於京都国立博物館

登石健三 三〇・九・二六 於本研究

登石健三 三〇・一・一九 於東京国立博物館

F 展 観

梁 楷 名 作 展

於 本 研 究 所 三〇、一二、一〇

本年は、本研究所が美術研究所として発足以来二十五周年に当るので、記念行事として「梁楷名作展」を開催した。參觀者は、本研究所周員をはじめ、関係者四百名に上り盛況であつた。出陳目録は左の通りである。

梁楷名作展覽目録

一、絹本着色 出山秋迦図「御前図画梁楷」

鑑蔵印一 (三、八九×一、七一尺)

一幅 志摩英一氏

二、絹本着色 雪景山水図「梁楷」

鑑蔵印一 (三、七〇×一、六七尺)

一幅 志摩英一氏

三、絹本着色 雪景山水図「梁楷」

鑑蔵印「雜華室印」外一印 (三、六五×一、六五尺)

一幅 東京国立博物館

四、紙本墨画 六祖截竹図「梁楷」

鑑蔵印「道有」(二、四六×一、〇六尺)

一幅 東京国立博物館

五、紙本墨画 李白吟行図「梁楷」

鑑蔵印(八思巴文字力)(二、六八×一、〇二尺)

一幅 文化財保護委員会

六、紙本墨画 布袋図「梁楷」

大川普濟賛 鑑蔵印「雜華室印」

(二、六七×一、一〇尺)

一幅 村山長拳氏

七、紙本墨画 寒山拾得図「梁楷」

鑑蔵印「雜華室印」(二、六八×一、二二尺)

一幅 箱根美術館

八、絹本墨画 水鶏図「梁楷」(〇、八一×〇、八二尺)

一幅 箱根美術館

九、絹本墨画 芦鴨図「梁楷」(〇、七六×〇、七六尺)

一幅 山内健二氏

十、紙本墨画 布袋図「李維」

佩谿広聞賛(三、六六×一、〇九尺)

一幅 妙心寺

四、施 設

A 光学的研究設備

昭和二十七年年度には、それまでの研究結果に基づき、海外における研究機関の設備を参考として、機関研究費の交付をうけ、本格的な設備を整えるに至つた。その後漸進的ではあるが、その充実を図り現在左の通りの設備をもつてゐる。

(1) 固定式装置

a 白色X線透過装置(一〇〇キロヴォルト) 一台

b 単色X線透過装置(銅を対陰極とする) 一台

(附、螢光板及び螢光板支持台、防X線用衝立各一組)

c 紫外線照射装置（ファイリップ社製二二五W紫外線電球三箇使用）二台

d ナトリウムランプ照射装置（ファイリップ社製一四〇W大型ナトリウムランプ一箇使用）二台

e 双眼実体顕微鏡及び顕微鏡写真撮影装置（ツアイス・オプトン社製）（附、顕微鏡支持自在器）一式

(2) 可搬式装置（現地撮影用）

a 可搬式白色X線透過装置（八〇キロヴォルト）及び附屬品一組

b 可搬式単色X線透過装置（ソフテックス）一台

c 可搬式紫外線照射装置（二二五W紫外線電球一箇使用）二台

B 保存研究設備

昭和三十年度の機関研究費の交付をうけたので、主として本年左の設備を整えるに至つた。

a 分光光度計（紫外及び可視、日立製作所製）一台

c （反射光、透過光を電氣的に波長ごとに測定ができ、從つて色を數量的に扱える）

b 恒温恒湿槽（東洋理化学工業社製）一台

c （温湿度の任意の条件下で美術品の劣化試験が可能）

c 分光器（紫外用水晶分光器）組立中 一台

c （主として分光分析に用いる）

d 光電管比色計（コタキ製作所製）一台

e （比色分析に用いる）

e 紙耐擦試験器（上島製作所製）

c （紙の揉みに對する強さを測る）

C 蔵書と資料

(1) 蔵書

所蔵図書は、東洋古美術、近代日本美術、西洋美術關係を主として、和漢洋書を合せて約一二、〇〇〇部である。他に美術關係雜誌、充立目錄類及び拓本等がある。本年は、各地の文化財についての報告類、各大学における出版物との交換受贈をはかつた。又諸外国の美術館、研究所等の出版物も本研究所発刊の「美術研究」と交換受贈を進めている。現在主な諸外国との定期交換受贈先は次の通りである。

1. University of London
2. British Museum
3. Museum of Eastern Art
4. Art Institute of Chicago
5. The Cleveland Museum of Art
6. Harvard Yenching Institute
7. The New York Public Library
8. Los Angeles County Museum
9. University of Michigan
10. University Museum, Pennsylvania
11. M. H. de Young Memorial Museum

12. Columbia University in the City of New York
 13. The Library of Congress
 14. The Detroit Institute of Arts
 15. Musée Guimet
 16. Bibliothèque Nationale
 17. Monsieur P. Demiéville
 18. Société Asiatique
 19. ICOM
 20. l'Ecole Française d'Extreme Orient
 21. Museum fuer Ostasiatische Kunst, Köln
 22. Verlag George D. W. Calvwy
 23. Museum von Aziatische Kunst
 24. Kern Institute
 25. Prof. Dr. Jahn
 26. Выблнотакта Академии Наук СССР
 27. Государственная библиотека СССР имени В. Ленина
- Отдел
- Международного книгообмена
28. 中国人民对外文化協會
 29. 文物參考資料編輯委員會
 30. Société des Etudes Indochinoises
 31. Bibliotekt, Ostasatisea Samlingarna
 32. Museum of Eastern Asiatic Arts

たものであるが、その後柳山愛輔氏、黒田照子氏、田中良氏等からの寄贈もふくまれており、随時陳列替を行つてゐる。毎週木曜日午後一時から四時まで一般に公開している。陳列品の主なるものは、

「知感情」、「花野」、「湖畔」、「赤髮の少女」、「もるる日影」、「温室花壇」等がある。

なお、昭和二十九年七月は、黒田清輝氏没後、満三十年に当り、同月七日より二十七日まで、本研究所以及国立近代美術館との共催で「黒田清輝展」が開催された。

E 閱 覧 室

本研究所の図書及び研究資料は、「研究資料閲覧規程」を設けて公開している。閲覧者は主として研究者、学者、美術関係専攻の学生等で、年間の閲覧者数は延一、二〇〇名程度である。

F 土 地 と 建 物

1 土 地

四四一坪

2 建 物

五三五坪四合(但、延坪)

本館(地階及び二階建鉄筋コンクリート造り一棟)及び東京国立博物館構内に木造平屋建一棟(保存科学部)、の外に東京芸術大学音楽学部邦楽教室の一部(芸能部)を使用している。

建 物 内 訳

備 考	坪 数	室 区 分
閱 覧 室 共 用	40 坪	資 料 室
	20 シ	資料並に研究室
二階建、一階 19.5坪	39 シ	書 庫 室
黒田清輝氏作品陳列	40 シ	記 念 室
会 議 室 共 用	40 シ	陳 列 室
所長、部長、庶務室	19.1 シ	管 理 室
美術部使用	36.9 シ	研 究 室
	6.9 シ	事 務 室
	19.2 シ	写 真 室
	19.1 シ	写真暗室等
	6.9 シ	写真原板室
黒田清輝氏作品倉庫	6.9 シ	二 階 倉 庫
	8.5 シ	車 庫
	184.9 シ	倉庫渡廊下等
二 室	8 シ	芸 能 研 究 室
三室及び暗室	40 シ	保存科学研究室
	535.4 坪	計

五、刊 行 図 書

A 昭和三十年の刊行図書

(1) 美 術 研 究

(第一七九号—第一八二号)

(2) 光学的方法による古美術品の研究

(三〇、三、二五発行 光学研究班)

(3) 日本美術年鑑 昭和三十年版

B 既刊図書

支那古版画図録	(美術研究資料第一輯)	昭七
吉備大臣入唐絵詞	(同)	昭九
微宗摹張宣撫練図絵	(同)	昭一〇
鳳凰堂雲中供養仏	(美術研究資料第四輯)	昭一一
桃山時代金碧障壁画	(同)	昭一二
富貴寺壁画	(同)	昭一三
印度及南部アジア美術資料	(同)	昭一四
光悦色紙帖	(同)	昭一四
菱田春草	(同)	昭一五
能恵法師絵詞	(同)	昭一六
宮素然明妃出塞図卷	(同)	昭一六
日本美術資料	第十一輯	昭一六
同	第一輯	昭一三
同	第二輯	昭一四
同	第三輯	昭一五
同	第四輯	昭一六
同	第五輯	昭一七
近代日本美術資料	第一輯	昭二三
同	第二輯	昭二四
同	第三輯	昭二六
墨跡資料集	第一輯	昭二六
同	第二輯	昭二四
同	第三輯	昭二六

源氏物語絵巻

黒田清輝素描集

栄山寺八角堂

栄山寺八角堂の研究

美術研究

日本美術年鑑

東洋美術文獻目錄

同 続編

美術研究索引

法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究

黒田清輝作品集

六、職員 (昭和三十年十二月一日現在)

所長

美術部長

第一研究室長

第二研究室長

源氏物語絵巻	昭二四
黒田清輝素描集	昭二四
栄山寺八角堂	昭二五
栄山寺八角堂の研究	昭二六
美術研究	第一号 第一七八号
日本美術年鑑	昭和十一年版 同二十九年版
東洋美術文獻目錄	昭和六年 同十年
同 続編	昭和十一年 同二十年
美術研究索引	第一号 第一百号
法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究	昭二八
黒田清輝作品集	昭二九
所長	文部技官 田中一松 東京
美術部長	文部技官 福田敏男 福岡
第一研究室長	文部技官 熊谷宣夫 山形
	文部技官 伊東卓治 静岡
	文部技官 高田修三 三重
	文部技官 川上涇 東京
	技術員 田村悦子 東京
	技術員 柳沢孝長 野
	文部技官 (併任) 米沢嘉圃 秋田
	文部技官 隈元謙次郎 鹿児島
	文部技官 岡畏三郎 東京

資料室長

芸能部長(事務代理)

文部技官	中村伝三郎	兵庫
文部技官	関千代	東京
技術員	池田京子	富山
技術員	神谷栄子	愛知
文部技官	新規短男	三重
(併任)		
文部技官	吉川逸治	神奈川
(併任)		
文部技官	河北倫明	福岡
(併任)		
文部技官	中川千咲	東京
文部技官	秋山光	東京
文部技官	久野健	東京
文部技官	上野了平	神奈川
文部技官	小沢健志	東京
技術員	猪川和子	東京
技術員	永雄ミエ	東京
技術員	宮次男	三重
技術員	橋本弘次	茨城
文部補助員	市川和正	千葉
(併任)		
文部技官	加藤成之	東京
文部技官	浦山政雄	東京
文部技官	横道萬里雄	兵庫
文部技官	三隅治雄	東京
(非常勤)	岸辺成雄	京都

保存科学部長
(事務代理)

庶務室長
庶務係長

会計係長

七、本研究所関係法規並びに規程
(一) 文化財保護法(抜萃)

研究員	池田弥三郎	東京
(非常勤)		
研究員	戸部銀作	東京
(非常勤)		
文部補助員	新井範子	静岡
臨時筆生	佐藤道子	東京
文部技官	関野克	東京
(併任)		
文部技官	岩崎友吉	神奈川
文部技官	登石健三	東京
文部技官	江本義理	東京
技術補佐員	茂木曙	群馬
(非常勤)		
技術補佐員	吳屋充庸	東京
(非常勤)		
文部補助員	橋本義雄	東京
臨時筆生	見城敏子	東京
文部事務官	小島忠二	新潟
文部事務官	加藤輝之	東京
文部事務官	羽田吉一	福島
文部事務官	藤江金治	広島
事務員	長沢朝夫	岩手
臨時筆生	藤森國子	長野
雑務手	鎌田幸四郎	東京
雑務手	鶴田豊次郎	東京

第一章 総則

(この法律の目的)

第一条 この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする。

(文化財の定義)

第二条 この法律で「文化財」とは、左に掲げるものをいう。

一 建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書その他の有形の文化的所産でわが国にとつて歴史上又は芸術上価値の高いもの及び考古資料(以下「有形文化財」という。)

二 演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的所産でわが国にとつて歴史上又は芸術上価値の高いもの(以下「無形文化財」という。)

三 衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗慣習及びこれに用いられる衣服、器具、家屋その他の物件でわが国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの(以下「民俗資料」という。)

四 貝冢か、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡でわが国にとつて歴史上又は学術上価値の高いもの、庭園、橋りょう、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地でわが国にとつて芸術上又は観賞上価値の高いもの並びに動物(生息地、繁殖地及び渡来地を含む。)、植物(自生地を含む。)及び地質鉱物(特異な自然の現象の生じている土地を含む。)でわが国

にとつて学術上価値の高いもの(以下「記念物」という。)

2 省 略

3 省 略

(政府及び地方公共団体の任務)

第三条 政府及び地方公共団体は、文化財がわが国の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであり、且つ、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであることを認識し、その保存が適切に行われるように、周到の注意をもつてこの法律の趣旨の徹底に努めなければならない。

(国民、所有者等の心構)

第四条 一般国民は、政府及び地方公共団体がこの法律の目的を達成するために行う措置に誠実に協力しなければならない。

2 文化財の所有者その他の関係者は、文化財が貴重な国民的財産であることを自覚し、これを公共のために大切に保存するとともに、できるだけこれを公開する等その文化的活用にも努めなければならない。

3 政府及び地方公共団体は、この法律の執行に当つて関係者の所有権その他の財産権を尊重しなければならない。

第二章

第三節

(附属機関)

第二十条 委員会の附属機関として、文化財専門審議会、国立

博物館及び国立文化財研究所を置く。

(国立文化財研究所)

第二十三条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う。

2 国立文化財研究所の名称及び位置は、左の通りとする。

名	称	位	置
東京国立文化財研究所	東京	都	
奈良国立文化財研究所	奈良	市	

3 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

4 国立文化財研究所及びその支所の内部組織は、委員会規則で定める。

第四節 職員

(職員)

第二十五条 委員会に置かれる職員の任免、昇任、懲戒その他人事管理に関する事務については、国家公務員法(昭和二十二年法律第二百十号)及びその特例に関して規定する法律の定めるところによる。

(定員)

第二十六条 委員会に置かれる職員の定員は、別に法律で定める。

(従前の国立博物館)

附則第二百二十四条 法律(これに基く命令を含む。)に特別の定

のある場合を除く外、従前の国立博物館及びその職員(美術研究所及びこれに所属する職員を除く。)は、この法律に基く国立博物館及びその職員となり、従前の国立博物館附置の美術研究所及びこれに附属する職員は、この法律に基く研究所及びその職員となり、同一性をもつて存続するものとする。

2 この法律に基く東京国立文化財研究所は、従前の国立博物館附置の美術研究所の所掌した調査研究と同一のものについては、「美術研究所」の名称を用いることができる。

(二) 教育公務員特例法施行令(抜萃)

第三条の二 文部省設置法(昭和二十四年法律第四百十六号)第十三条に掲げる機関(日本芸術院を除く)並びに文化財保護法(昭和二十五年法律第二百十四号)第二十条に掲げる国立博物館及び研究所の長及びその職員のうちもつばら研究又は教育に従事する者については、法第四条、第七条、第十一条、第十二条、第十九条、第二十条及び第二十一条中国立大学の学長及び教員に関する部分の規定を準用する。この場合において、これらの規定中「大学管理機関」とあるのは「任命権者」と読み替え、これらの機関の長及びその職員をそれぞれ学長及び教員に準ずる者としてこれらの規定を準用するものとする。

(三) 東京国立文化財研究所組織規程

(昭和二十七年三月二十五日文化財保護委員会規則第四号、昭

和二十九年六月二十九日文化財保護委員会規則第一号第一次改正)

(東京国立文化財研究所の組織)

第一条 東京国立文化財研究所の所掌事務を分掌させるため、左の三部及び一室を置く。

美術部

芸能部

保存科学部

庶務室

(美術部の三室及び所掌事務)

第二条 美術部に、美術部の所掌事務を分掌させるため、第一研究室、第二研究室及び資料室の三室を置く。

2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術の調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術の調査研究並びにその結果の公表に関する事務のほか、黒田記念室に関する事務をつかさどる。

4 資料室においては、美術研究資料の作成、収集、整理、保管、公表及び閲覧並びに美術研究資料に関する写真の作成及びその原板の保管並びにエックス線写真、赤外線写真、紫外線写真その他の特殊写真による美術の研究に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び所掌事務)

第三条 芸能部に、芸能部の所掌事務を分掌させるため、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び郷土芸能研究室の三室を置く。

2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにその保存に関する調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

4 郷土芸能研究室においては、郷土芸能及びその保存に関する調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

(保存科学部の三室及び所掌事務)

第四条 保存科学部に、保存科学部の所掌事務を分掌させるため、化学研究室、物理研究室及び生物研究部の三室を置く。

2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的及び分析的調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究並びにその結果の公表に関する事務をつかさどる。

(庶務室の所掌事務)

第五条 庶務室においては、左の事務をつかさどる。

一、別に文化財保護委員会から委任を受けた範囲における職員の仕事に關すること。

二、公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に關すること。

三、經費及び収入の予算、決算その他會計に關すること。

四、行政財産及び物品の管理に關すること。

五、職員福利厚生に關すること。

附則

1 この規則は、昭和二十七年四月一日から施行する。

2 美術研究所組織規程(昭和二十六年文化財保護委員会規則第五号)は、廃止する。

附則

この規則は、昭和二十九年七月一日から施行する。

研究所内規程

1 研究資料閲覧規程

第一条 本研究所の図書及び研究資料(以下単に「資料」という)の閲覧は、この規程の定めるところによる。

第二条 資料の閲覧は無料とする。

第三条 資料の本研究所外の持出しは禁止する。

2 一部の重要な資料は公開しないことがある。

第四条 閲覧者は、本研究所において適当と認めた者の紹介が

なければならぬ。

第五条 閲覧者は、所定の申込票に必要事項を記入し提出しなければならぬ。

第六条 閲覧者は、研究上資料の閲覧が長期にわたるときは、一定期間有効の閲覧票を交付する。

2 期間を経過した閲覧票は返還しなければならぬ。

第七条 閲覧者は、所定の借出票に必要事項を記入し、閲覧票を添えて提出しなければならない。

2 閲覧終了後資料は掛員が検取し、引換えに閲覧票を返還する。

第八条 閲覧人員は、一時に概ね十名以内とし、一人一回に貸出しする資料は左の通りとする。

図書 三部十冊以内

写真 三種以内

2 閲覧中の資料であつても本研究所において必要があるときは返還させることがある。

第九条 閲覧は本研究所閲覧室以外で行つてはならない。

2 閲覧室においては、インク、墨汁等の使用並に飲食喫煙を禁止する。

第十条 閲覧者は、資料を鄭重に取扱わなければならない。

2 閲覧者が資料を滅失、毀損及び汚損したときは本研究所で定める損害の賠償をなさなければならない。

第十一条 閲覧者がこの規程に反すると認めるときは、閲覧許

可を取消すことがある。

第十二条 閲覧時間は、午前十時より午後三時三十分までとし、閲覧停止日時は左の通りとする。

毎週、水、土、日曜日

祝日

開所記念日(十月十八日)

年末年始(十二月二十五日より翌年一月七日まで)

夏期(八月一日より八月三十一日まで)

第十三条 本研究所において必要があるときは、前条の閲覧時間及び日時を随時変更することがある。但しこの場合には予め揭示する。

2 黒田子爵記念室観覧規程

第一条 本研究所の黒田子爵記念室(以下単に「記念室」という)は、この規程によつて一般に公開する。

第二条 観覧は無料とする。

第三条 観覧者は、備付けの帳簿に現住所、氏名を記載し、掛員の指示を受けるものとする。

第四条 陳列品の模写又は写真撮影を希望する者は、予め書面により届出で許可を受けなければならない。

第五条 観覧者は、記念室内において左の事項を行つてはならない。

一 陳列品に手を触れること。

二 インク、墨汁等を使用すること。

三 飲食及び喫煙をなすこと。

第六条 観覧者がこの規程に違反し、又記念室公開の趣旨に反する行為があると認めるときは、退場を命ずることがある。

第七条 観覧の日は毎週木曜日午後一時から同四時までとし、観覧を停止する日は左の通りとする。

祝日

開所記念日(十月十八日)

年末年始(十二月二十五日から翌年一月六日まで)

夏期(七月二十一日から八月三十一日まで)

第八条 本研究所において必要があるときは、前条の日時を随時変更することがある。但しこの場合は予め揭示する。

昭和三十一年一月三十日印刷

(非売品)

昭和三十一年二月一日発行

編集発行者 東京国立文化財研究所庶務室

印刷所 大蔵省印刷局

発行所 東京国立文化財研究所

東京都台東区上野公園(電)四四八七
一九二三